

# ロンサール詩集注

## その1—3

「マリー・スチュアートへのエレジー」

江 口 修

(承前)

- 101 Le jeune Amour, que dans le cœur je porte,  
 102 M'apprent d'enfance à vivre en telle sorte,  
 103 Qui de ses dards, des hommes triomphans,  
 104 Blesse d'un coup & vieillards & enfans :  
 105 Mais plus l'enfant, lequel desjà commence  
 106 Porter la fleur de sa blonde Jouvence  
 107 Sur le menton, & qui commence aussi  
 108 Porter au front un amoureux souci,  
 109 ayant le sang plus chaut que de coustume.

101 《Amour》については、Malcolm QUANTONが*Ronsard's ordered chaos* (Manchester University Presse, 1980) で興味深い指摘を行っている (pp.180—181)。「活力としての霊的愛という捉え方は基本的には『恋愛詩集』(1552—53)に限定されるだろう。確かに1569年にロンサールはその最も鮮明にして断固たる新プラトン主義宣言とも言うべき詩二編でこの考え方を再びとっているが……——中略——この二編に重きを置くべきではないだろう、というのもいずれも必然性を欠いた文学的習作というだけではなく、詩自体に自己否定的あるいは自己戯画化の傾向が見られるからである。

もっとも意義深いことは、1578年版『エレヌへのソネット』での新プラトン主義的テーマが、時代の文学的流行へのそして愛人への追従であること

を別にしても、『カッサンドルへの愛』とその調子と扱い方において大きく異なっているということである。1578年のプラトン主義詩編の多くは審美的考察に関わるもので、エレーヌは精神と完璧な肉体美の、あるいは理想美の典型 (*parangon*) として描かれている。肉体を活性化するものとしての魂への言及は、一ヶ所手短かなものを除いて、もはやない。またプラトニックな愛の超越性やそれと関連した魂のイデア界への上昇という考え方も消え去ってしまっている……」

この詩編ではギリシャ神話以来の愛の神「アモル」が問題となっているが、ロンサールにあっては神話上の人格としての「アモル」と「愛」は比較的自由に涉り合っており、さらに「若い」と「壮年の」という形容詞が付けられていることから見ても、ロンサールの諦念ともいえるべき、すべてを死へと誘う「時」(クロノス)の支配を受け入れた晩年の世界観を見て取ることもできるだろう。

101 78—87の版では《……qu'au fond du cœur je porte》と変えられているが(L版脚注)、次行の《d'enfance……》と《dans……》の音韻上の重複を避けるためだろうか。

106 《Jouvence》：もちろん「青春」(*jeunesse*)の意であろうが、十七世紀以降はもっぱら《la fontaine de Jouvence》(「若返りの泉」)の形で用いられており、十六世紀ほどの頻用は見られない。ここでロンサールが大文字で始めているのは、「アモル」と並べた、神話的擬人化のためであろう。あるいは、Louis TERREAUXの「《jeune》/《jeunesse》という重複を避けるために《jouvence》を用いている……」(Ronsard, *Correcteur de ses œuvres*, Genève, 1968, p.377)という指摘にとどまるべきか。

以下拙訳を試みておく。

わが心に宿せし若きアモルは、  
 幼くしてかくなる運命に生きよと教え、  
 その箭もて、凱歌に酔う人間たちを、  
 一撃にて老いも若きも容赦なく討つなるが、  
 すでにその顎に黄金に輝く青春の花を  
 咲かせ始め、また額に愛の憂いたたえ  
 始めし、かの少年にこそその  
 打撃より深し、彼の血潮  
 とりわけ熱きがゆえならん。

110 Ce grand Amour qui les Princes allume  
 111 M'a fait sentir au cœur devant le temps  
 112 Ce qu'un grossier ne sent qu'en son printemps,  
 113 En me faisant amoureux devant l'age  
 114 De vos vertus & de vostre visage :  
 115 Puis il faudroit que je fusse un rocher,  
 116 Si vivement je ne sentoie toucher  
 117 De vos beaux yeux mon ame toute esmue,  
 118 Puis que si belle icy je vous ay veue,  
 119 Royne & ma soeur, & d'un regard si doux  
 120 Tirer noz cœurs & noz yeux apres vous.

110 78—87年版では指示形容詞《ce》が101行に合わせて《le》に変えられている(L版脚注)。《grand》は、《jeune》との対比からすれば、先に述べたように「壮年の」であろうが、初出形での指示形容詞は、さらにマリー・スチュアートの美貌が宮廷を席捲したことへの直接的言及とも考えられよう。

111 《devant》は「*davant* という形でも現れるが、〈時〉についても用いられる……」（グーゲネム、p.189）113についても同じ。

112 78—87年版では《……ne sent qu'à cinquante ans》とより具体的になっている。《grossier》は「大商人」、「貴顕の士」（いずれもユゲ）でありこの場合もちろん「貴顕の士」であるが、確かに権力者の絶頂期とはまさに「我が世の春」であり、また五十代でもあるだろう。

（拙 訳）

壮年のアモルは諸侯の恋情を掻き立て  
 年端もゆかぬ我に、貴顕の士もその春にのみ  
 知る味わいを密やかに味合わせしめたり、我  
 貴方の徳とその顔容に幼くして恋せしがゆえ。  
 しかし我石と化す他はなし、貴方の美しい目に  
 掻き乱されし我が魂のさらに打ち震えるを  
 感ぜずにおかながためには、王妃にして我が姉君  
 かくも美しき貴方が、その甘き眼差しもて、  
 我ら皆の心を、我ら皆の目を引き従えしを  
 目の当たりにしたかゆえに。

- 121 Mais dequoy sert, ô Royne, de me plaindre  
 122 Puis qu'à mon bien je ne sçaurois atteindre ?  
 123 La parenté, l'alliance qui est  
 124 Entre nous deux grièvement me desplaist :  
 125 Ce nom de soeur charitable m'outrage,  
 126 Je voudrois estre ou moindre de lignage,  
 127 Ou moindre en tout : je n'eusse pas senty

128 Ce plaisant mal qui de vous est sorty.

121 《dequoy sert》：「*Servir* は目的補語が非生物に属する代名詞の場合は（今日では *à* を用いるべき構文だが）前置詞 *de* を先立たせることができる……」（グーゲネム、p.160）

124 《*grièvement*》についてユゲを参照すると、*péniblement, difficilement, avec peine, /gravement, fortement, /sévèrement, /sérieusement* と実に多くの副詞を列挙して説明しているが、十六世紀では「未だ《*gravement*》との明確な分離がなされていない」（グーゲネム、p.208）だけのことであるようだ。《*-ment*》を用いた副詞の新造語はかなり野放図に行われ、名詞から作られることもあった。

126 《*être moindre de~*》は通常、数量表現を従えて、「~を下回る」という意味になるが、この場合は形容詞の補語を導くものと考えざるを得ない。《*être de haut lignage*》（「名門の出」）に依るとも考えられる。

127—128 78—87年版では《*Ou moindre en tout : lors je pourrois guarir/Ce mal d'amour dont il me faut mourir*》と、かなり大幅な変更が加えられている。ロンサールには初出形のように《*plaisant*》と反義的な語を併置する修辞が多く見受けられる。ペトラルキスムの伝統といえるが、ロンサールは特に好んで用いている。一例として『恋愛詩集』から挙げておこう、

Mais le tourment, qui moyssonne ma vie,  
Est si plaisant que je n'ay point envie  
De m'esloigner de sa douce langueur :

(L., t. IV, p.103)

私見を述べさせていただくなら、初出形にはロンサール本来の修辭的奔放さを感じられる。《mal d'amour》は既に十七世紀の常套区《maladie d'amour》を思わせる。

(拙訳)

なれど、王妃、我嘆いたとてあだなし、  
 宝とする貴方を手にする術なきがなれば。  
 ああ！二人を縛る姻戚の縁の  
 深く我を傷つけることか。  
 優しき姉様とお呼びするたび心激し、  
 劣る家門の出であったなら、すべてに  
 劣る者ならば、貴方なるがゆえのこの  
 心地よき苦しみを味わうこともなかりしものを。

129 Ha! frere mien, tu ne dois faire plainte  
 130 Dequoy ta vie en ta fleur est esteinte :  
 131 Avoir jouy d'une telle beauté  
 132 Deux ou trois ans valloit ta royaulté  
 133 Et tout le bien qu'un grand monarque amasse :  
 134 Car tel plaisir toute richesse passe,  
 135 Et seulement il n'appartient qu'aux Dieux  
 136 De vous aymer & de baizer vos yeux. —

130 この《dequoy》は前出121行目のそれとは機能を異にしている。すなわち、「《de ce que》という接続の言い回しと同じ役割」（グーゲネム、p.91）を果している。

132 78—87年版では《Sein contre sein, valloit ta royauté》と詩興を

も変えかねない変更がなされている(L. 版脚注)。変更後の方がアクセントが強く、多少論理の勝る展開に強拍を加える効果をもたらしている。

136 78—87年版では《D'oser penser combien peuvent ses yeux》となり、《vous》および《vos》によって生じている文法的不安定さを一応解消している。ちなみにヴァリエーション中の《peuvent》は動詞 *pouvoir* の絶対的意味での用法で「力を持つ」の意 (*M. L.*, p.238)。

ここで、ロンサールのシャルル九世に代わっての義姉マリー・スチュアートに対する愛情告白は終わる。異様とも言える手の込んだ仕掛であるが、修辞自体は概ね常識的なもので、ガドッフルの言う「散文的楽節」(前掲)の典型と見ることができよう。以下一転して、変転目まぐるしいイマージュ中心の詩節が再開される。

(拙訳)

ああ、兄上、人生の花かという時に  
命終えられたことを嘆いてはなりません。  
かように美しき方と二あるいは三とせ  
楽しく生きられたことはこの王国に匹敵し、  
帝王の集めし財宝すべてに等しきなれば、  
かくの如き喜びはあらゆる富に優り、  
ただ神に帰するのみにあらずや、  
貴方を愛し、その瞳に接吻しうるは。

137 De tels propos je parle pour mon maistre,  
138 Qui fait semblant en son Image d'estre  
139 Plein de soupirs, & d'une voix qui vient :  
140 Mais le portrait de cire la retient  
141 Close en la bouche, & luy rompt la parole :

- 142 Et toutefois la cire tendre & molle  
 143 En devient palle & retient la couleur  
 144 De l'amoureux tout palle de douleur,  
 145 Qui se tourmente, & par soupirs desire  
 146 D'estre entendu, & si ne l'ose dire.

139—142 78—87年版では大幅な変更が加えられている箇所、ヴァリアントも並べて検討しなければならない（L. 脚注）。

- 139 Plein de soupirs, & voudroit s'efforcer :  
 140 Outre les dents la voix ne peut passer :  
 (Mais hors des……, 87年版)  
 141 Le mort tableau luy oste la parolle,  
 142 Et la peinture en larmes toute molle

校訂版の特徴は、こう言ってよければ、「散文的合理性」への配慮ではないか。特に注目すべきなのが《cire》（絵画の仕上げに上塗りするニスのこと）を除いていることで、私見ではあるが、視点の変更あるいはイメージの配置の合理化が起きていると考えられる。その意味で初出形は確かにバランスを欠いているが、視点の微細な部分への移動集中を示し、マニエリスムの特徴を窺わせている。さらに《cire》を「絵」の提喩に用いた初出形の方が、肖像画中のシャルル九世と詩人との断絶を示し、このエレジーを一貫する「懸隔」の主題に沿って、極めて个性的かつ効果的に思われる。

146 71—87年版では行頭の前置詞《de》が除かれ、78—87年版では後半が《& si ne le peut dire》に変更されている。意味的にも音調の上でも重苦しさが減じられている。

この詩節については、ヴァリエントも並べて拙訳を試みて置こう。

かく主君に代わりて語らえど  
 我が君その肖像にて、嘆きに満ち  
 今にもお声を発せんがばかり。  
 なれどニスの下の肖像画ではその  
 声は口にこもり、言葉も途切れぬ。  
 けれど緩く柔らかなるニスはそれ故か、  
 愛する者の苦悩の色か、青み帯びぬ、  
 悶える君は、嘆息にてか、その思いを  
 届けんとす、言わずもがな。

(ヴァリエント)

嘆きに満ち、あらがえど  
 そのお声歯を越えてこぼれえず  
 動かぬ肖像なれば言葉も奪われぬ  
 なれどその涙にて絵も柔らみ  
 青ざめ (…)  
 (…)、とは言えぬまでも。

147 Vous d'autre part faittes semblant d'avoir  
 148 En gré sa plainte & de la recepvoir,  
 149 Et l'appellant luy ouvrir de voz villes  
 150 Les riches ports & les havres fertilles :  
 151 Mais ceste mer qui s'espent entre—deux,  
 152 D'un large champ escumeux & ondeux,  
 153 Vous porte envie, & ne veut point, ce semble,  
 154 Que soyez joints par mariage ensemble :

155 Et qu'est-il rien plus fascheux que la Mer ?

156 Qui ne tient rien qui ne soit tout amer ?

148 所有形容詞《sa》と直接補語人称代名詞《la》は唐突に現れ、困惑させられるが、明かにマリー・スチュアート。整理して置くと、147—153の《vous》はシャルル九世、三人称に置かれているのはマリー・スチュアート。154行で省略されている《vous》は二人である。

150 ここまでの四行で、ローモニエは「このエレジーがマリー・スチュアートの再婚以前に書かれた」と判断している(脚注)。確かにこの節はシャルル九世の叶わぬ求婚が語られており、二人を分かつのは「海」でしかない。

151 《entre-deux》は副詞句であり、「間に(を)」の意。

155—56 《rien》は十六世紀にあって、語源的な意味の《quelque chose》で用いられることも、さらには「無」(*le néant*)をも意味することがある。形容詞を従える場合も、現在のように《de》を介さず直接取ることができた。

78—87年版では《…plus cruel que la mer,/Mer qui son nom a desrobé d'amer》と変更され、《rien》による遊びが影をひそめている。

(拙訳)

さらに我が君、義姉様の嘆きを肯べない  
呼び返さんと、賑わう港、小なれど  
豊かなる港にその門戸を開けと  
お達しを出されんがご様子、  
なれど間を隔つるは、広莫たる  
波立ちしぶき飛ぶ、かの海にして

望み運べども、お二人の、婚儀によって  
 結ばれるは望まぬかに見ゆる。  
 海よりなおつれなきものありや、  
 苦みよりほかなきわだつみよ。

- 157 Vous n'êtes seule à qui ceste marine  
 158 S'est fait connoistre envieuse & maligne.  
 159 Hero le sçait, Helles, & cette là  
 160 Que le Toreau desguisé viola,  
 161 Qui fut ensemble & si sage & si belle,  
 162 Que nostre Europe a porté le nom d'elle.

157 《marine》：「十六世紀すでに今日用いられている意味（＝海軍、海運等）は持っていたが、この意味に限定されるのはずっと後のことである。」（ユゲ、*L'évolution du sens des mots*, p.148）当時は「海」として頻繁に用いられた、押韻上でも重宝がられた語である。

158 上述のことからもあるが、ローモニエの脚注によると「押韻：maline と発音。ここではラテン語の意味、すなわち〈質の悪い〉、〈有害な〉の意味で今日では《fièvre maligne》（悪性熱病）にしかこの意味は残っていない。」

159—162 ローモニエの脚注もあるが、ここで簡単に取り上げられている三つの神話について紹介しておこう。まずはヘローとレアンドロスの神話。

レアンドロスはヘレースポントスの岸边にあるアビュドスの町の若者、そしてヘローは、対岸のセストスの町でアフロディーテに仕える巫女であった。夜毎レアンドロスは泳いで川を渡った。あるものによればセストスの燈台の

明りを目印に泳いだとのこと、また他のものによればヘローが塔の頂にかざした松明に導かれたとのことである。とある嵐の夜、いずれの明りにせよ、炎が風に吹き消されてしまった。レアンドロスは方向が分からなくなり、溺れ死んだ。その亡骸は砂浜に打ち上げら、それを見つけたヘローは、絶望のあまり自ら命を絶った。

次にプリクソスとヘレー。

金羊毛伝説の一挿話。いけにえにされかかっていた若者プリクソスを、金羊毛が現れ妹のヘレーと共に助け、連れ去った。二人はヨーロッパとアジアを隔てる海峡を渡ろうとしていたが、ヘレーは足を滑らせ海に落ち溺れ死んでしまった。この故事にちなんでこの地をヘレースポントスと呼ぶようになった。

次いではエウロパのあまりにも有名な逸話であるが、念のため。

神殿のバルコニーから下界を眺めていたゼウスは、エウロパの若さ溢れる美しさに見とれ、愛の神のいたずらだが、恋してしまった。嫉妬深い妻ヘーラーは留守だったが、用心のため雄牛に変装してエウロパの前に現れた。見事な雄牛振りでやすやすとエウロパと仲間の娘たちに近付いたゼウス、それとは知らず大胆なエウロパはそっと横たわった雄牛の背中にまたがってしまった。ここぞとばかりにエウロパを背中に乗せたまま、ゼウスは大海原へと駆け出した、途中エウロパはありとあらゆる海獣や海神に遭遇、生きた心地もなかった……二人はクレタ島へと至り、愛の巣を営み、その子たちは地上を統べる王となった。

ローモニエの脚注によれば、これら三つの神話の「ヘローとレアンドロス」はクレマン・マロによって、「エウロパ」はオイヴィディウスからアントワーヌ・ド・バイーフによってフランス語に訳されている。

(拙訳)

なれど海のつれなく当たるは  
マリー様、貴方だけにはあらし、  
へローもへレも、そしてあの  
ゼウスの扮した雄牛にさらわれし  
賢明にして美貌の、我らが  
ヨーロッパの名の由来となりし娘にも。

- 163 Je suys marry que la douce Venus  
164 Nasquit des flots d'escume tous chenus :  
165 Elle d'Amour la compaigne & la mere  
166 Digne n'estoit d'une naissance amere,  
167 Des flots couverts d'horreur & de peril,  
168 Mais debvoit naistre au Printemps, en Avril,  
169 D'un pré fleury, pres d'une eau gazoillante  
170 Desur la mousse, & non de la tourmente.

163 《marry》：動詞 *marrir* 「苛立たせる」の過去分詞（ユゲ）。

164 ここでローモニエはアフロディーテがヴィーナスの別名であることに言及している（前号参照）。この脚注でロンサールがヴィーナスが海の泡から生まれたことから、《escumiere》という形容詞を造り出している。M. L. によれば、これはフランス語の語尾を多少変更してギリシャ風にするプレイアド派が好んで行った造語法の一つである（t. I, p.62）。

前節と合わせ、この部分はロンサールの面目躍如といった、神話と現実を重ね、人物をイメージ的に多層化して描く詩法の極みである。ロンサールは生涯この詩法を捨てることはなかった。

(拙訳)

我、ビーナスの白き泡藻より  
生まれ出でしに不快なり。  
アモルの母にして連れ合いに  
恐怖と難破に満ちし海よりの、  
苦塩の出生はふさわしからじ、  
春は四月の生まれにあるべきぞ、  
花満つ野辺は、急流にはあらずして、苔蒸す上を  
さんざめく水のほとりこそふさわし。

171 C'est pour monstrer que l'Amour est trompeur,

172 Amer, cruel, plain de crainte & de peur,

173 Comme celuy qui porte en ses mains closes

174 Plus de chardons que de lys ny de roses.

174 ローモニエは脚注で、マリー・スチュアートの再婚そして再々婚が破局に終わったことを述べている。また「ここでも、ロンサールは、中世よく行われたように、ギリシャ神話を教訓として解釈している。『アマデイス・ジャマンへのエレジー』でユリシーズとシレーヌの伝説から引き出した教訓と比較して見るべきであろう」としているが、この点でも未だエレジーがジャンルとして成熟していないことが窺えるだろう。

《lys》と《roses》とは、言うまでもなく、「フランス」と「イングランド」。両大国に挟まれたスコットランドの象徴がまさに《chardons》（「あざみ」）で、出来すぎといえれば出来すぎている。

(拙訳)

これもアモルの人を欺き、つれなく、  
残酷ながら、疑いと不安に満を示さんがため。

ユリやバラよりもあざみを  
手にする者のごとくに。

その他最近の論文のうちから、注釈ではないものの、ジャンルとしてのエレジーに言及しているものを一つ紹介しておこう。

エレジーでは、あらゆるレトリックの粋を無視し、ディスクールの表現力が重視される。従って、あらゆる言葉の綾、叙情の調子が盛り込まれるものと定義されるだろう、賛辞から罵倒まで、ノスタルジーからイロニー、悲嘆から上機嫌にいたるまで。 (Nathalie DAUVOIS, *L'élégie ronsardienne, essai de définition d'un genre*, in *Ronsard en son IV<sup>e</sup> centenaire*, II, Genève, 1989, p.43)

前号でも触れておいたことだが、ロンサール集注の試みは『人文研究』という場を借りた形では、これをもって終わりにしたい。続編については、まとまり次第、私家版の形で公表したい。

訳のニュアンスが不統一であることについては、筆者の逡巡の現れとご理解いただきたい。

(完)